

第2回 品川区子ども読書活動推進計画策定委員会 会議録（要旨）

日 時：令和元年7月22日（月）13時30分～15時30分

会 場：品川区役所第2庁舎 教育委員会室

出席者： ◎委員長、○副委員長

委員	(出席委員) 本城善之委員◎、島田貴司委員○、豊岡耕一郎委員、平嶋悦子委員、巻島淳子委員、廣田子ども育成課長、佐藤保育課長、守田源氏前小学校長、蜂屋戸越台中学校長、丸山八潮わかば幼稚園長、鈴木品川保健センター保健担当係長（代理出席） 大関教育総合支援センター長（オブザーバー）
事務局	横山品川図書館長、邑橋事業担当係長、渡辺事業担当係長、菴原事業担当主査、小田桐主任主事、門脇主事、林主事、比嘉主事、青木指導主事 指定管理事業者（事業等報告）

傍聴者：1名

1. 第一回の振り返り
2. 事業の報告
3. 先進事例紹介
4. 今後の計画の構成について

<主な意見>

委員：小・中学校において読書に障害がある子どもに対する取り組みはあるのか。また、小・中学校から区立図書館につなぐことはあるのか。

事務局：毎年度、区立図書館から学校に向けてマルチメディアデジターの紹介は行っている。

委員：品川区は子どもの人口が増えているが、対人口比で見ると図書館設置のバランスがよくないと感じている。海に近い地域は図書館が少ない。子どもたちは日々成長していくので、仮設でもよいので早急に環境整備がなされるとよい。

事務局：図書館が不十分な地域があることは認識している。地域の施設に図書館の資料を団体向けに貸出し、身近に本を取れる環境をつくってはいるが、子どもが本

を借りる上で支障があるなら改善する余地はあると思う。商店街と連携した読み聞かせは取り組んでいるが、中野区のような図書館が地域に出張して貸出を行うことについても検討したい。

委員：読書に障害がある子どもには、視覚障害によって困難である場合と識字等の困難がある場合がある。状況を整理しないと適切なサービスができないのではないかと。マルチメディアデジターが取り上げられたが資料点数が少なく、子どものニーズに応えられないかもしれない。タブレット端末で電子書籍を読み上げる機能があるので、電子的な資料の活用も含めて対応を検討していく方がよいと思う。

事務局：従来の図書館の障害者支援サービスは視覚障害者向けが多く、しかも大人が想定されており、改善の余地がある。ディスレクシアが着目されており、対応を図っているところであるが、現状は十分ではないと考えている。

委員：小学校の図書館運営支援員が業務を行う上で大切なことは2点ある。ひとつは読み聞かせで終わることなく児童文学の関心を高めることである。もうひとつは学習支援で、小学校を卒業する時点では調べ学習に必要なスキルを身につけてもらうことである。そのためには支援員のスキルが必要であり、研修機会も設けているが、支援員が学校に配置される日数が少なく、子どもへの対応に限界がある。

事務局：学校からは支援員を毎日配置してもらいたいという意見は聞くこともあるが、予算上、難しいところである。区内の学校全体からニーズが上がってくるようになれば、日数を増やすことも検討できるようになると思う。

委員：新しい指導要領では主体的に考えることが重視されるようになっており、そのための学校図書館の活用も求められている。それを踏まえると、まずは環境の整備であり、その環境を活かすようにするという順序で考えるべきではないか。支援員も日々子どもと接する機会があれば、活動の充実につながるはずである。また、現在、支援員を派遣する事業者は学校によって異なるが、品川区における統一したガイドラインがあれば統一的な支援ができるのではないかと。

事務局：品川区として統一的な質を求めているところだが、個々のスキルによる。教育委員会でも状況を把握し、適正なレベルになるように指導を心がけている。

委員：小学校では朝読書をしており、好きな本を読んでいる。週に1回は図書館を活用する時間も設けている。読み聞かせなど、子どもが主体的に本を読むための取り組みは様々に行っている。調べ学習は先生によって取り組み状況が異なり、学校図書館の活用も同様である。そのなかで支援者がより多い時間配置されたとしても、必ずしも調べ学習が活発になるとは言いにくい。

委員：目的にある「本等を活用する」という点では、学校図書館と区立図書館で連携して、調べ学習に必要な本を取り寄せてはいる。ただ、生徒たちはインターネ

ットで容易に調べることが多い。文章をじっくりと読み、情報を精査して文章を書くということは少なくなっている。工夫はしているものの、インターネットを使う子どもが多い。

中学校には図書時間はなく、図書室はアクセスしにくい場所にあるので、学級文庫の充実や移動図書館の実施するといった取り組みを行っている。中学生については本を買って読む子どももいるので、そのような実態も捉えるべきだろう。

委員：高校生向けの取り組みとしてビブリオバトルが挙げられることがあるが、既に読書をしている子どもたちが参加するものだと思う。本を読まない子どもは参加しない。不読率を下げることを目指すのであれば、高校において強制的にであれ本を読ませる時間をつくるしかないかもしれない。図書館が地域に出て行くよりも、高校に入った方が効果が上がるのではないか。

事務局：読書は強制されるものではなく、自主的に行うものだと考える。いま読んでいなくても習慣としては身につけていけばよいとも思う。強制的に読むような方法が一定効果的であることは分かるのだが、今回の計画では異なる方法を考えたい。

本の価値を知っていることが重要だと思う。何かを調べるときにパソコンを使うこと自体はよいと思うが、本で調べた情報とは異なることは認識してもらいたい。また、本でないと調べられないことがあると判断できるようになる必要があると思う。身近に文化的な環境があるにもかかわらず、本を読み、調べ、何かを知るという習慣がないまま大人になるのはもったいないと感じている。

委員：強制的な取り組みは避けたいということは共感するところである。幼稚園では、家庭や図書館と連携し、よい本に出会うための環境を整備したいと考えている。本が好きだという子どもに育ってほしいと思っているが、やはり家庭の環境も重要だと思っている。家庭とも連携しながら環境を整えていきたい。

委員：0歳から読み聞かせを行う家庭も増えているようだが、本を読む大人になってももらいたいと思っているのだと思う。ただ、子どもの成長とともに本のページ数が多くなっていくと、自分で読めるといって読み聞かせをしなくなる家庭が多いと思う。ただ、何歳であっても、読んでもらいたいということもあると思う。本の楽しみ方を限定せず、様々な広がりがあるということを伝えていった方がよいのではないか。年齢に関わらず読み聞かせをするような取り組みをすればよいのではないかと思う。

委員：中学生もブックトークを楽しみにしている。七夕のボランティアでは中学生が子どもに読み聞かせをしたのだが、それも大切な機会なのだろう。高齢者も読み聞かせは楽しいものだろうから、様々な人たちが様々な対象に読み聞かせをするような取り組みがあればよいと思う。強制的に読ませる機会があってもよ

いと思うが、この計画では、自ら本に親しみ考えていけるような促しをしていけるとよいと思う。

事務局：大崎図書館は病院と併設されているので、高齢者向けの読み聞かせを試験的に行った。病院の方から治療のためになるという提案があったからだが、今後も継続して取り組むことで推移を見たいと思う。

委員：配布資料に大学生とあるので、大学図書館についても紹介させてもらいたい。大学生も主体的に本を読む子どもは少ない。授業がアクティブラーニング形式になっているので、大学図書館は利用されているが、本は読まれてない。そのなかで本を読む学生に話を聞くと、絵本から児童書、マンガ、ライトノベル、そして小説へと移行するようだ。読まない子どもはどこかで断たれてしまうようだ。大学生でも本を読む子どもとそうでない子どもに二分化されており、読まない子どもはどのようにすれば本を読むようになるのかは課題である。強制的にではなく、主体的に本を読むようになるための方策を考えていきたい。高齢者について意見が出たが、イギリスの研究では読書が高齢者の健康にとって効果があるという報告もある。子どもの読書も大事だが、高齢化が進むなかでは高齢者も大事だと思うので、参考にされるとよいと思う。

5. 事務連絡

今回は8月19日(月)に開催予定です。

以上